

○美琴の車・車内（夜）

運転席から見るフロントガラス。

フロントガラス越しには闇の中で信号が赤く灯っている。

Ｚ「信号は可逆的だ。赤が突然として青に変わり、そして再び赤に戻る」

運転席に座る藤美琴（ふじ・みこと）（19）。黒いダウンを羽織り、つぶらな瞳をしている。

美琴の目元がバックミラーへと向く。後部座席には誰も座っていないことがバックミラー越しに確認できる。

ハンドルを握っている美琴はバックミラーに向かい、手を振る。その後、直視で後部座席を確認する。

美琴「そりやそうか」

美琴、視線を前方へと戻す。

歩行者は誰一人いない。だが、歩行者用信号は煌々と青が灯り続けている。

美琴の鼻の先が赤くなり始めている。

前方を見ながら下唇を噛む美琴は、

美琴「もうー」

と少し不満を漏らしながら、車内暖房の出力ボタンを最大限まで上げる。

『21:41』を示す車内時計をチラッと見る美琴。

○美琴の車・車外（夜）

信号が赤から青に変わる。

美琴の車の前輪タイヤが前方へと進み出す。

○美琴の車・車内（夜）

美琴「……ギリギリかな」

ハンドルを両手で持ち、前方を鋭い眼差しで見る美琴。

○県道245号線（夜）

美琴の車は真つ直ぐ伸びる一車線道路を走っていく。

○瀬戸内第四高校・正門前（夜）

瀬戸内第四高校と書かれた看板。

正門付近に美琴の車が到着する。

○美琴の車・車内（夜）

美琴、正門前に車を停車させるや否や、急いでサイドブレーキを上げ、車外へと勢い良く飛び出す。

○瀬戸内第四高校・正門前（夜）

車外から勢い良く出てきた美琴。車のライトやエンジンは未だ付いたまま。

辺りをキョロキョロと見渡す美琴。

足を正門に掛け、乗り越えようとする。

○瀬戸内第四高校・校庭（夜）

暗闇の中、ライトをつける事なく、小走りする美琴。

○瀬戸内第四高校・プール脇（夜）

暫くすると美琴の走る足は止まり、瀬戸内第四高校敷地内のプール脇に到着する。

プールの周りは高さ約3mのフェンスで囲われており、美琴はフェンスを乗り越えようと、一瞬フェンスの高さを確認する。その後、フェンス越しのプールを見つめ、下唇を噛む。携帯のライトを付ける美琴。プール周辺を照射し、様子を確認する。

暗くてもプールは苔で青々としている様子が確認できる。キョロキョロと辺りを見渡す美琴。その後、

美琴「乃木さんいる？乃木さん」

と小声で囁く。

暫くして、フェンスを超えた先にある更衣室内で懐中電灯の明かりが灯る。

その様子を確認した美琴。表情が少し明るくなる。

○瀬戸内第四高校・プール・更衣室（夜）

薄暗い更衣室。部屋は木造構造であり、9畳の狭い空間。床には杉板が貼られている。

更衣室の扉を開け、入り口で立ち尽くしている美琴。

美琴から見た左手には脱いだ服を置く20cm四方のボックスが壁一面に設置されており、右手には蛇口と丸鏡、白い陶器の流し台が設置されている。

更衣室の様子を静観する美琴。その背後で、乃木正志（のぎ・まさし）(72)が、自身の顔に懐中電灯を照射しては消す行為を何回も繰り返している。

何度もカチカチと鳴る音が気になり、背後を向く美琴。

乃木は美琴が振り向いた2秒後にゆつくりと、

乃木「わぁ〜」

と勢いのない声色で驚かそうとする。

美琴は表情を変えない。

美琴「乃木さん、そういう時は、勢いと声量が大切なんだよ」

美琴は優しい口調で乃木へ伝えた後、更衣室内の丸鏡前に移動する。

乃木「だからかいのー、この間、孫が帰って来た時も美琴ちゃんと同じ表情しとったわい」

美琴「そりやそうだよ、お孫さん何歳になったんだっけ？」

丸鏡前で髪を整える美琴。

乃木「もう15や」

美琴「もうそんな大きくなったんだ」

乃木「ほうよ、だから、もうすぐ見ることが出来る年齢よ」

美琴「本当だね。『う』か……。でも皆が皆、見たいという訳ではないと思うよ」

乃木「今の子はそうなんかのー。でも、美琴ちゃんは見たかったからここに来たし、今も来ているんやろ？」

美琴「……私ほねーほら、昔も今も病んでる風貌してるじゃん」

美琴、乃木に向かって変顔をする。

乃木「毎度見ても、可愛らしく、健康的な表情しとるけどの」

美琴「そうかな」

乃木「そうよ。でも、見たくなかったとしても美琴ちゃんには早く紹介したいから、来年には連れてきたいんやけど」

美琴「だいぶ遠いね、来年とは。まーこんな片田舎に帰ってくる機会、そうそう無いもんね」

美琴の携帯のアラーム音が鳴る。

美琴「おつ、時間だ」

『22:00』を示す携帯。アラーム音を止める美琴。

乃木「じゃー、わしは外で見張でもしてくるわ」

美琴「うん、毎度毎度ごめんね」

乃木「おーん」

乃木は更衣室の扉をゆつくりと閉め、外に出る。

○瀬戸内第四高校・プール・更衣室前(夜)

更衣室前のコンクリート階段に座っている乃木。

震えながら、懐中電灯を自身の顔に照射し、小声で「わあー」と復唱している。

○瀬戸内第四高校・プール・更衣室(夜)

蛇口から水が流れている。

更衣室内は夜風によって扉が少し軋む音と流し台に水が溜まる音だけが響いている。

丸鏡前にいる美琴、流し台に水が一杯になるのを待っている。

美琴、目の前にある丸鏡を見つめる。

美琴「初めまして、2024年の者です」

笑顔で丸鏡に語りかける美琴。

美琴、丸鏡に気を取られている内に、流し台から水が溢れ出す。

少し慌てた様子で蛇口を捻り、水を止める。

白い陶器の流し台一杯に溜まった水。

水面に美琴の顔が映る。人差し指が水面を揺らす。

美琴「冷たっ」

水面に映る美琴の表情。先程よりも少し強張っている。

夜風によって扉が少し軋む音がする。

美琴「よし」

意を決めた美琴。勢い良く、流し台に顔を突っ込み、目を開けたまま数秒間静止する。それと同時に、流し台から大量の水が溢れ出し、美琴の足元に大量の水がかかる。

美琴、ズボンが濡れても気に留めず。

水中で何度も瞬きをする。だが、顔を水中から上げようとしない。

暫くして、水面に気泡がぶくぶくと浮かび出す。

水中の美琴の眉間には皺が寄っており、水で濡れた足元は何度も地団駄を踏んでいる。

突然、水中にある美琴の耳元に、結城優斗（ゆうき・ゆう

と）(36)の声が囁かれる。

結城「聞こえますか」

美琴は水中で首を縦に振る。

結城「聞こえたら、上がって来て下さい」

美琴は再び、水中で首を縦に振り、勢い良く水中から顔を上げる。

美琴「うわあ、死ぬ」

水中から顔を上げた美琴は目と口を一杯に開き、空気をふんだんに吸おうとする。

美琴、目の前にある丸鏡を見る。美琴が見つめる丸鏡には美琴の姿はなく、美琴と同様に顔面が濡れ、目を一杯に見開いた結城の姿がある。

結城、髪の毛は水で濡れているため乱れているものの、造形としては清潔感があり、涼しげな目元をしている。

結城「はー、はー、はー。……どうも」

美琴「はー、はー、はー。……どうも」

美琴と結城、互いに相手を気にすることなく、息を整えることを優先する。

結城より先に息が整った美琴。丸鏡に向かって、

美琴「初めて、2024年の者です。恐らく貴方は私にとって大切な人です。初めてですか？」

美琴は顔面が濡れながらも、笑顔で丸鏡に語り出す。

結城「……ちよつと、待つてくださいね」

美琴「もちろんです」

結城、腰に手を当てながら息を整える。

結城「お待たせしました。で、なんの質問でしたっけ？」

美琴「えつと、初めてですか？」

結城「いえ、2回目です」

美琴「あ、そうなんですネ」

結城「はい。……失礼ですが、お名前とご年齢を教えてくださいもいいですか？」

美琴「遅くなりました、藤美琴と言います。19歳です」

結城「19歳、お若いですね。結城優斗、36歳です」

美琴「よろしくお願いします」

結城「よろしくお願いします」

美琴「……」

結城「……」

沈黙が流れる。

美琴「あつ、そういえば、結城さんは、何年の方でしたっけ？」

結城「何年？じゃー、ゲーム性を持たせるために、一問一答みたいな感じで当ててみます？」

美琴「それは、私が結城さんに質問して、何年の方が当てていくという事であっています？」

結城「そうそう、どうです？」

美琴「いいですね、やりましょう。そういうの好きです」

丸鏡に映る美琴と結城の表情は次第に柔らかくなっている。

○瀬戸内第四高校・プール・更衣室前(夜)

更衣室前のコンクリート階段に座っている乃木。

先ほどよりも震えながら、懐中電灯を自身の顔に照射し、小声で「わぁー」と復唱している。

○瀬戸内第四高校・プール・更衣室(夜)

美琴が見つめる丸鏡には髪を掻き上げている結城がいる。

美琴「じゃーあ、結城さんは既婚者ですか？」

結城「一発目それ？」

美琴「はい」

楽しそうな美琴の表情。

結城「……んー、ノーコメントで」

美琴「ノーコメント？」

結城「うん」

美琴「一発目からそれだと一生突き止めることできませんよ」

結城「いや、その質問から俺の時代を突き止めることはかなり難しいと思うんだけど？」

美琴「難しいかもしれないけど、できるかもしれませんよ。結婚してなかったら晩婚化の時代に生きる方の可能性あるとか」

結城「なるほどね。でも、とりあえず、今回はノーコメントで」

美琴「そっかー、じゃー次の質問は」

再び髪を掻き上げる結城。

美琴「好きな歌手は？」

結城「んー、特定の歌手はいないけど、Hip hop 全般好きだよ」

美琴「……好きだった朝ドラは？」

結城「んー、あんまり朝ドラは見たことないから、分からないな」

美琴「好きな映画は？」

結城「1970年代に公開されたマッドランズかな」

美琴、前髪を掻き上げると同時に、眉間に皺を寄せる。

美琴「なるほど。……特定できてきました」

結城「表情と言葉がリンクしてないよ」

結城、少し優しい表情をする。

美琴「意外と難しいものですね。もっと、簡単にわかるかと」

結城、口元を緩めながら腕時計を見る。

結城「ごめん。こっちから言い出したものの、時間の関係もあるし

俺のことはもういいよ」

美琴「じゃあ、最後の質問！これで無理だったら、諦めるから」

結城「オッケー。何？」

美琴「……好きな食べ物は？」

呆気にとられた表情をする結城。

結城「あーごめん。もっと核心的なものが来るかと思ったら」

得意げな表情をする美琴。

美琴「で？答えは？」

結城「えつとねー、早苗キッチンのハンバーグ定食かな。まあ、言

っても分らないと思うけどね」

驚いた表情をしている美琴。

結城「ん？どうした？」

美琴「あの、自分で言うのもなんですけど、思った以上に核心的で

あったかもしれないです」

結城「……嘘」

美琴「嘘じゃないです」

結城「本当？行ったことあるの？」

美琴「行ったことはないけど。恐らく、見たことはあつて。でも、結城さんの言ってる好きな食べ物が、私の知っている食べ物だとしたら、そう遠くは離れていないということですよ」

結城「そうだね。……なんか、こんな非現実的なことやっている割には意外と狭い世の中でできているんだなって感じるよね」

美琴「ですね」

美琴と結城が感嘆していると突然、丸鏡に霜が降ってくる。

結城「あ、そろそろ時間っぽいな。ごめんね、俺のしょうもないクイズに付き合ってもらって」

美琴「いや、しょうもなくはないですよ。タメになる話たくさん聞かせてもらいました」

結城「例えば？」

美琴「……人生最高の一品を食べることは、何事にも勝るとか？」

結城「拡大解釈しすぎだよ」

ニヤリと笑いながら答える結城。

丸鏡には更に霜が降っている。

美琴と結城の間に沈黙が流れる。

結城、霜を拭おうと手で丸鏡を拭く。

美琴「この霜は拭いても落ちませんよ」

結城「……知ってるよ、でもこうやって拭こうとするとこの時間、悪いもんじゃなかったと思ってくれるかもしれないじゃん」

美琴「拭こうとしてくれなくても、悪いもんじゃなかったですよ」

結城「いいんだよ、自己満でやってるから」

結城は未だ霜を拭おうと手で丸鏡を拭く。

結城「最後に聞かせて。美琴さんだよな？」

美琴「はい、藤美琴です。……それだけですか？」

結城「もうちょつと欲張らせて（笑）。……美琴さんは、何故、ここに來てるの？」

結城、未だ霜を拭おうと手で丸鏡を拭く。

美琴、少し左上を見た後に霜を拭おうと手で丸鏡を拭く。

美琴「んー、一言で言うと、世間知らずだと思ってるから？」

結城「……それは、若さから来る？」

美琴「いや、どちらかと言うと今までの自分の選択結果から来る」

丸鏡に映る美琴の表情は、大半が霜で隠れているが、つぶらな瞳が伏し目になっていることは確認できる。

結城「じゃあ、今日出会った所在不明の怪しげな男性から、一つ選択肢を与えるよ」

結城、霜で隠れそうな美琴の伏し目を指でなぞる。

結城「人生最高の一品を食べることは、何事にも勝るのは本当かもしれないと言ふこと」

丸鏡に映る美琴の片目が糸目になる。

美琴「質問し甲斐があったかものです」

結城「それなら、……よかった」

丸鏡に映る結城の冷ややかな片目が霜で徐々に隠れていく。

○瀬戸内第四高校・プール・更衣室前（夜）

更衣室前のコンクリート階段で体を震わせている乃木。

更衣室から美琴が出てくる。

美琴「乃木さん、寒い中ごめんね。ありがとう」

乃木「おん。こんな冬場に長老を外に出しては改めてあかんと思っただわ」

美琴「本当にごめん。帰りに自販機で何か温まるもの買おう」

乃木「美琴ちゃんは、世渡り上手じゃの」

美琴「そんな嬉しいこと言ってくれるの？乃木さんは罪な男だな」
美琴と乃木、正門に向かって歩いて行く。

（終）